

後期・邪馬台国の時代⑧

～隠岐の島～

河村哲夫

古代出雲学の現状と問題点

古代出雲を語る時、注意すべき重要な視点がある。

最近、駒澤大学教授瀧音能之氏の『出雲の謎大全』(青春出版社)を読んだが、そのなかに、

「出雲神話といっても、ひとまとめにすることは難しいのである。少なくとも『記・紀』にみられる出雲に関する神話を、出雲系神話といい、『出雲国風土記』にみられるものを出雲神話と称するようになってきている。出雲系神話と出雲神話、一見するとまぎらわしいだけのように思われるかもしれないが、異なった出雲の神話観を表わす言葉として仕方のないことなのである。したがって、出雲系神話と出雲神話とを不用意にまぜて使ったりすることには慎重でなければならないのである

と書かれている——まさに、このことである。

すなわち、大和朝廷の役人によって創作された『古事記』『日本書紀』の「出雲系神話」と、出雲の人々によって記された『出雲国風土記』の「出雲神話」の二つがあるという基本スタンスである。

それでも、『古事記』『日本書紀』に対する「出雲系神話」という表現はまだましな方である。

それ以前は、『古事記』『日本書紀』そのものを否定・抹殺し、その内容は大和朝廷の役人らが創作したいわば「ほら話」とされていた。

たとえば、佐伯有清氏の『研究史邪馬台国』(吉川弘文館、昭和 46 年)には、

「軽視できないことは、最近出版される邪馬台国関係の論著の多くは、安易に大和朝廷に結びつけようとしたり、女王卑弥呼を天照大神や倭迹迹日百襲姫命など神話や伝承上の神や人物に比定しようとしていることである。その傾向は近年著しく強まってきている。これは、まことに危険な傾向といわなくてはならない」

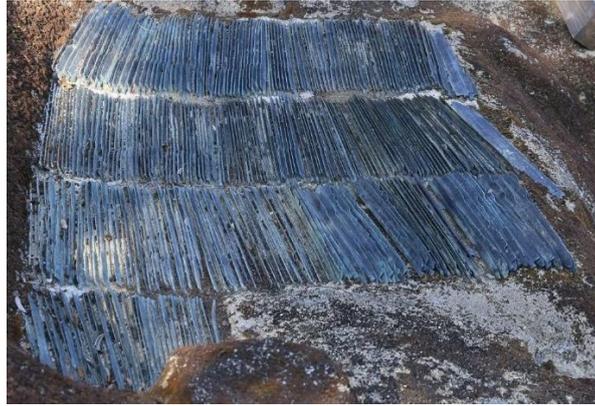
と、邪馬台国など日本の古代史に関して、『古事記』『日本書紀』を用いて論じる、そのこと自体を「まことに危険な傾向」と厳しく批判していたのである。

このような戦後の風潮に基づき、『古事記』『日本書紀』に記載された出雲神話は虚構であり、『出雲国風土記』に記載された出雲神話こそが在地の出雲人によって語り継がれた真実であるとする論が主流となった。

ところが、出雲でとんでもない事態が発生した。

昭和59年(1984)夏、出雲市斐川町神庭(かんば)の荒神谷遺跡から、358本という膨大な数の銅剣が出土したのである。そもそも出雲は青銅器の空白地帯とされていた。

それまで出土した銅剣の全国総数が約300本であったから、1か所の出土でそれを上回ったことになる。



荒神谷遺跡の銅剣

しかも、翌昭和60年(1985)の夏には、大量の銅剣が出土したわずか7メートルの場所から、銅矛16本、銅鐸6個が出土した。



荒神谷遺跡の銅矛と銅鐸

さらには、平成8年(1996)秋、荒神谷遺跡の東南約3.3キロの地点——加茂岩倉遺跡(雲南市加茂町岩倉)から、銅鐸39個が出土した。



加茂岩倉遺跡の銅鐸

それまで最大の出土量を誇っていた大岩山遺跡(滋賀県野洲市)の24個を大きく上回る数量であった。



かくして出雲は、青銅器文化の先進地域に浮上した。

荒神谷遺跡の380本の銅剣と加茂岩倉遺跡の39個の銅鐸は、一括して国宝に指定された。

その後、西谷墳墓群(出雲市)、田和山遺跡(松江市)、妻木晩田(むぎ・ぼんだ)遺跡(鳥取県米子市・大山町)、青谷上寺地(あおや・かみじち)遺跡(鳥取市)など、出雲の古代文化の繁栄を示す遺跡が次々と発掘され、イザナミ・スサノオ・大国主命など出雲に関して3分の以上の大きなウエイトをかけて記した『古事記』『日本化書記』が再認識されることとなった。

——やはり、出雲は古代文化の一大拠点だったのだ。

戦後、否定・抹殺されていた出雲への見方が劇的に変わった。

それでも、それまでの出雲文化否定・抹殺論から一挙に反転することはきわめて難しい。

それまでの、学者としての基本的姿勢を問われかねないからである。

そのあたりの葛藤を如実に示しているのが、「出雲系神話」という造語である。

(一) 『記・紀』にみられる出雲に関する神話を「出雲系神話」という。

(二) 『出雲国風土記』にみられる出雲に関する神話を「出雲神話」という。

というのは、今後とも、国史たる『日本書紀』『古事記』よりも、地誌たる『出雲国風土記』を上位に置きつつけるという宣言にほかならない。

戦後長い間水底に沈められていた『日本書紀』『古事記』がやっとのことで水面に浮かび上がる機会を得たものの、上空には、やはり『出雲国風土記』が君臨している。

さらに留意すべきは、「出雲系神話」「出雲神話」というように、いずれにも「神話」という名称が付されていることである。「神話」という語のなかに、歴史ではなく、あくまでも天上界の物語・フィクション・文学というニュアンスが込められている。

実は、神話のなかに歴史の核を見出そうとするのは、すでに世界的な潮流となっている。

イエス・キリスト、ブッダ、孔子など伝説的な人物の存在を疑う擬古派がかつての世界的な流行であったが、歴史的なキリスト、歴史的なブッダ、歴史的な孔子の存在を示す物証などが明らかになり、神話のなかに歴史の核が存在するという認識が世界的な潮流となった。中国では、夏王朝のみならず、堯・舜・禹の存在を前提とした考古学的な調査も進められている。

にもかかわらず、日本においては、神話という名のもとに出雲の古代史——ひいては日本の古

代史を抹殺しようとする試みが、依然として継続している。日本人は始めるのも遅いが、止めるのもっと遅い。

冒頭において、「出雲を語る時、注意すべき重要な視点がある」と述べたのは、以上の理由に基づく。

筆者としては、国史たる『日本書紀』および『古事記』を基本に、『出雲国風土記』やその他の古代文献、地域伝承、社伝などを、平等・公平に総合的に活用して書き進めていくことを改めて申し述べておきたい。

古代の航路

大国主命を語る前に、まず隠岐の島について語りたい。

九州の「壱岐」および「沖ノ島」は、朝鮮半島との海の交流拠点として、歴史上大きな役割を果たしてきた。出雲北方の日本海に浮かぶ「隠岐の島」も、九州の壱岐および沖ノ島とおなじような役割を果たしていたことから、おなじような名になったのではないかと、にらんでいる。

下表をご覧ください。九州の邪馬台国のクニグニが朝鮮半島を往復する際の想定される航路である。九州のクニグニは、かならず壱岐と沖ノ島を経由している。

国	航路		備考
末盧国	往路	呼子→壱岐→対馬→朝鮮	魏志倭人伝コース
	帰路	朝鮮→対馬→壱岐→呼子	
伊都国	往路	糸島→(姫島)→(神集島)→呼子→壱岐→対馬→朝鮮	魏志倭人伝コース
	帰路	朝鮮→対馬→壱岐→呼子→(神集島)→(姫島)→糸島	
奴国	往路	博多→小呂島→壱岐→対馬→朝鮮	阿曇海人族
	帰路	朝鮮→対馬→壱岐→小呂島→博多	
宗像	往路	宗像→大島→沖ノ島→対馬→朝鮮	宗像海人族
	帰路	朝鮮→対馬→沖ノ島→大島→宗像	
出雲	往路	出雲→見島→油谷湾→宗像→大島→沖ノ島→対馬→朝鮮	宗像海人族の協力は不可欠
	帰路	朝鮮→対馬→沖ノ島→————→隠岐の島→出雲	最も危険なコース ・沖ノ島→隠岐の島は 320 km
		朝鮮→対馬→沖ノ島→————→見島→————→隠岐の島→出雲	上の航路よりやや安全 ・沖ノ島→見島は 106 km ・見島→隠岐の島は 215 km
		朝鮮→対馬→沖ノ島→油谷湾→見島→隠岐の島→出雲	上の航路よりやや安全 ・沖ノ島→油谷湾は 70 km ・油谷湾→見島は 50 km
		朝鮮→対馬→沖ノ島→油谷湾→見島→浜田→出雲	・隠岐の島を経由しない
		朝鮮→対馬→沖ノ島→宗像→油谷湾→見島→浜田→出雲	・隠岐の島を経由しない

ところが、出雲に関してはまったく状況が異なる。

日本海では対馬海流が西から東に流れているため、出雲から直接西方の朝鮮半島に向かおうとすると、対馬海流によって東へ押し戻されてしまう。

出雲から朝鮮へ渡るには、できる限り西に寄って——宗像あたりから出発する必要がある。

スサノオが天照大神と誓約(うけひ・占い)をして宗像三女神を獲得したのも、あるいは大国主命が宗像三女神のうち二人を妃にしたのも、このような背景があったとみていい。

ただし、沖ノ島の祭祀遺物が古墳時代の遺物に類似していることから、【宗像→沖ノ島→対馬→朝鮮】という航路が本格的に開発されたのは大和王権成立後とみるべきであろうが、『日本書紀』によれば、宗像三女神が海北道中(朝鮮航路)を所管していたとされていることから、弥生時代後期～終末期において、すでに沖ノ島航路が開発されていた可能性が大きい。沖ノ島には一時的に寄留したとみられる弥生遺跡も確認されている。

いずれにしても、出雲の海人族は、糸魚川のヒスイや出雲の碧玉などの出土状況からみて、北部九州玄界灘沿岸地域の宗像、奴国(福岡市等)、伊都国(糸島市)、末盧国(唐津市)などとも連携し、さまざまな航路を駆使して朝鮮半島と往復していたとおもわれる。



以上のことから、出雲から朝鮮半島への往路においては、隠岐の島の果たす役割——出番は、ないと断言していい。

しかしながら、朝鮮半島から出雲への復路・帰路においては別である。

対馬海流は、対馬から東北あるいは東に向かって流れている。

朝鮮から出雲に帰るとき、もし対馬海流の流れに乗ることが可能であれば、話はまったく変わってくる。

時速 1.5 ノット(時速 3.7 km)といわれる対馬海流の流れに乗って、そのまま日本海に向かえば、勞せずして出雲に帰ることができる。

西暦	内 容
763 年	渤海から帰国する日本使節平群虫麻呂の一行が遭難して隠岐の島に漂着
825 年	渤海国使高承祖ら 103 人が隠岐の島に来着
861 年	渤海国使李居正ら 105 人が隠岐の島に来着
888 年	新羅国人 35 人が隠岐の島に漂着
943 年	新羅船 7 隻が隠岐の島に来着

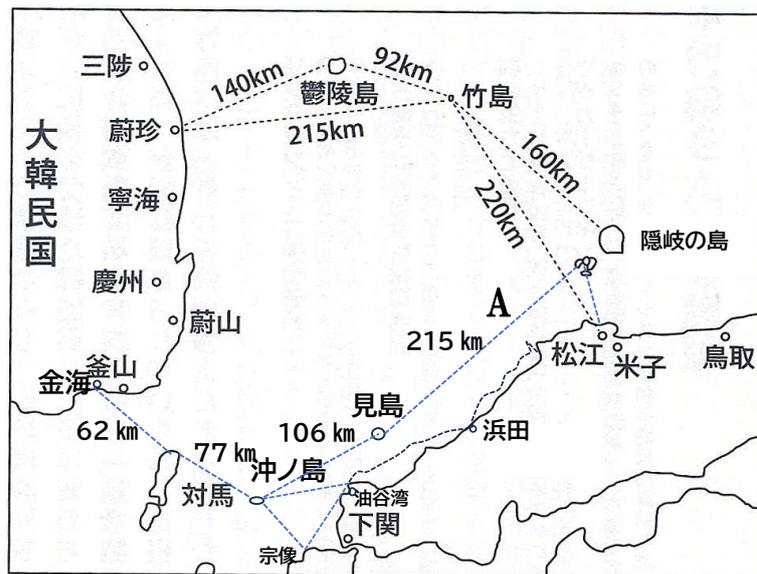
これらはいずれも、対馬海流の流れに乗って漂着または来着したものであった。

約 200 年間でたった 5 回の記録であるから、日常的に利用される海路ではなかったことがわかるであろう。

北東方面に流されて、日本列島から大きく離れ、ウラジオストクあたりに漂着する危険性も高いからである(B のコース)。もちろん、北海道方面に流される危険性もあった。

それを回避するには、狗邪韓国(金海)など朝鮮半島南岸からいったん対馬に向かい、対馬から対馬海流に乗って東方の沖ノ島をめざし、沖ノ島から見島を経由して一気に隠岐の島をめざす航路も考えられよう(A のコース)。

このコースであれば、隠岐の島が壱岐と沖ノ島とおなじような役目を果たすこととなる。



とはいえ、このコースを取った場合、大きな問題がある。

対馬から沖ノ島まで 77 キロ、沖ノ島から見島まで 106 キロ、見島から隠岐の島の島前まで 215 キロと、一区間の距離がきわめて長いのである。

下表のとおり、『魏志倭人伝』の一区間の距離は長くても狗邪韓国～対馬間の 62 キロに過ぎない。要するに、早朝に出航して日暮れ前に到着する距離である。

行程	水行	里数	実際の距離	備考
狗邪韓国→対馬	1 日	1,000 里	約 62 km	金海→対馬北端
対馬→壱岐	1 日	1,000 里	約 52 km	対馬南端→壱岐北端
壱岐→末盧	1 日	1,000 里	約 25 km	壱岐南端→呼子

ところが、沖ノ島～見島は 106 キロもあり、見島～隠岐の島は 215 キロもある。

1 昼夜あるいは 2 昼夜の航海である。

古代人にとって最も危険なのが夜間航海である。夜間に暴風雨などで流された場合、自分たち場所がわからなくなる。とりわけ、沖ノ島～見島間 106 キロは陸地からも遠く、避難できる島も近くにはない。

しかしながら、うまく風と海流に乗れば、最短時間で朝鮮半島から出雲に帰還することができる。

したがって、「いきの島」あるいは「おきの島」というのは、本居宣長のいう「一息つく島」ではなく、危険な航海から命を守ってくれる「生きの島」というような、生存そのものにかかわるもっと切迫した意味を有していたのかもしれない。

もちろん、安全・確実を期して、沖ノ島から宗像あるいは油谷湾をめざす航路も普通のコースとして採用されたとも考えられるが、この場合は、すでに述べたとおり、

【宗像→油谷湾→見島→浜田→五十猛村→出雲】

というスサノオ・五十猛命がたどった沿岸コースと重なり、隠岐の島を経由することはない。

隠岐の島

隠岐の島は、島根半島の北方約 50 キロ、隠岐海峡を隔てた東経 133 度・北緯 36 度付近に位置する島々である。

大きな島 4 島と約 180 の小さな島々からなる。面積約 350 平方キロ。人口は約 18,000 人。

島後水道を境に島前（どうぜん）と島後（どうご）に分けられる。

ちなみに、島を「どう」できなく、「どう」と呼ぶのは妙である。四国道後の「どう」とおなじ意味であるとする説もある。

島前と島後との距離は約 13 キロ。

島前は、西ノ島（隠岐郡西ノ島町）・中ノ島（隠岐郡海士町）、知夫里島（隠岐郡知夫村）の 3 島である。

島前の主な無人島

西ノ島周辺	中ノ島周辺	知夫里島周辺
星神島・大柱島など	松島・小森島・二股島など	島津島・浅島・大波加島・小波加島・神島など



それにひきかえ、島後は島後島(隠岐郡隠岐の島町)一島から成っている。面積は約 242 平方キロで、徳之島に次いで 15 番目の大きさの島である。



隠岐の島の黒曜石

黒曜石は、金属器が普及するまで、ナイフや矢じりなど日用品・武器として幅広く利用された。

黒曜石は火山活動でできる石ではあるが、火山であれば産出されるとは限らず、日本の産出地は50か所ほどで、このうち石器として利用されたとみられる遺跡は次の6か所とされている。

- ①北海道白滝
- ②長野県和田峠
- ③伊豆諸島神津島
- ④大分県姫島
- ⑤佐賀県腰岳
- ⑥隠岐の島(島後島)

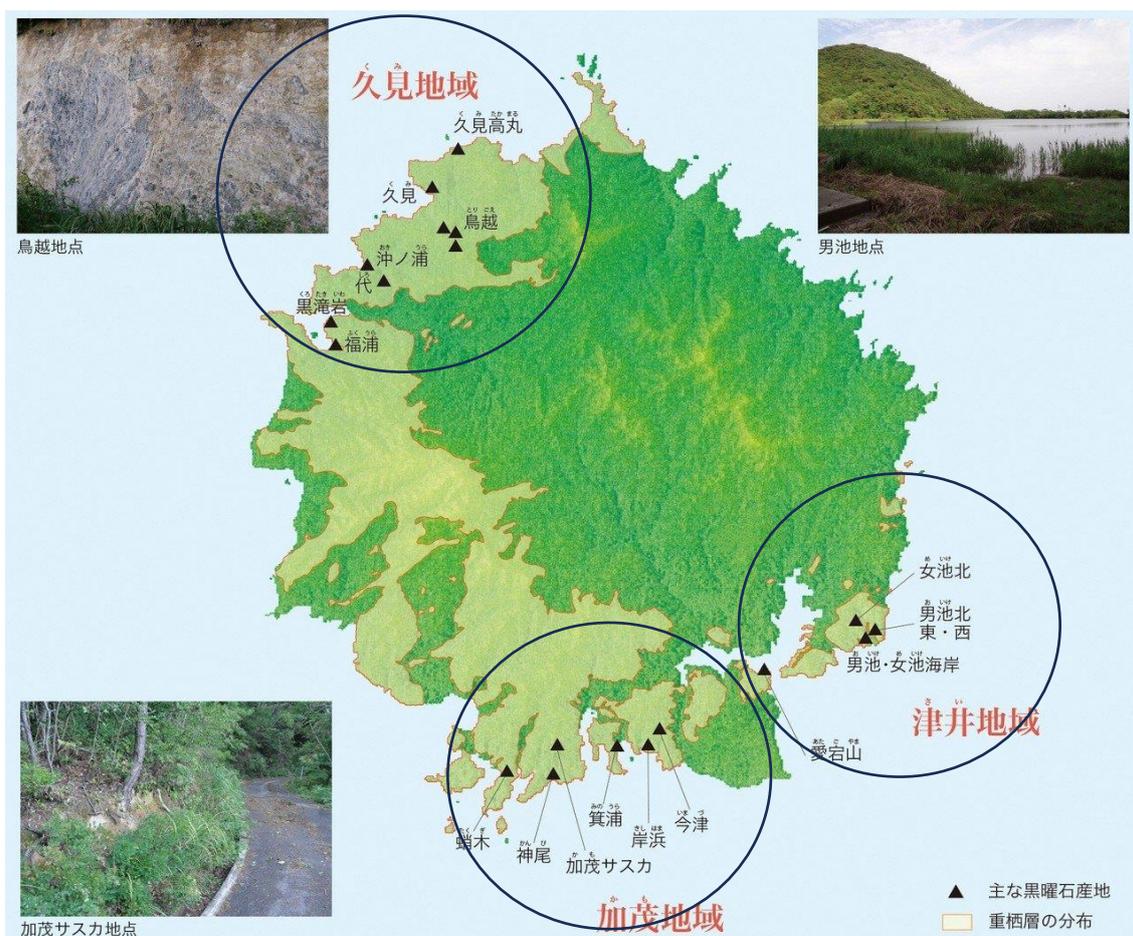
このなかに、隠岐の島の島後島が含まれている。

島後島の黒曜石の採取地点は、これまでに20ヶ所以上が確認されている(及川ほか 2014・2015 など)。

その採取地は、

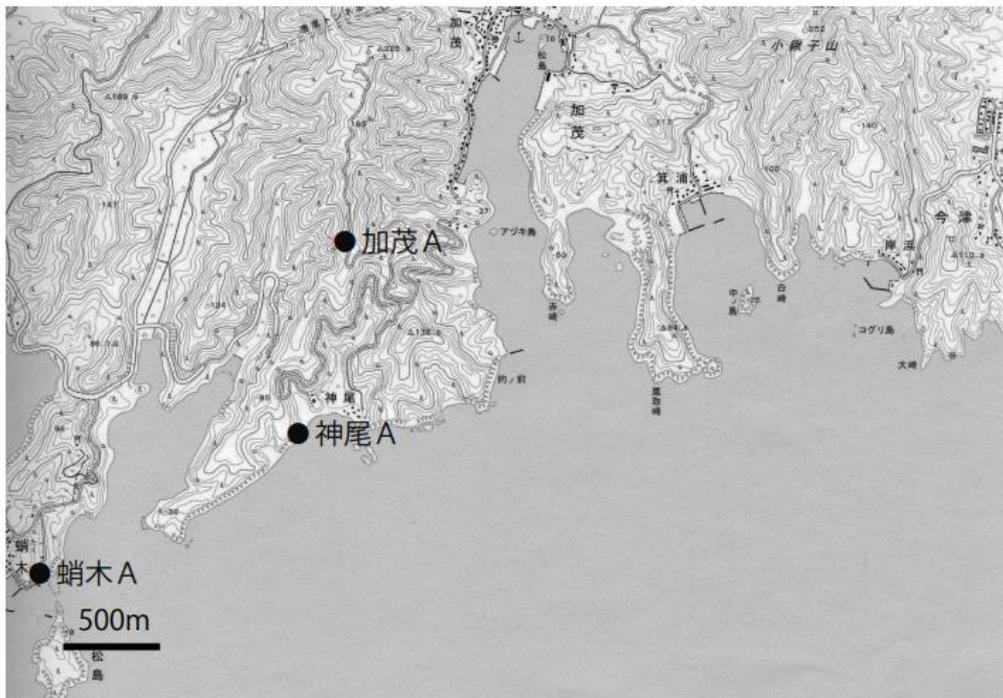
- ①久見地域(久見・久見高丸・鳥越・沖ノ浦など)
- ②加茂地域(加茂サスカ・神尾・箕浦・岸浜など)
- ③津井地域(男池・女池・愛宕山など)

の3地域に区分されている。



『旧石器電子辞書』(ハヶ岳旧石器研究グループ)より

② 加茂地域(加茂サスカ・神尾・箕浦・岸浜など)



隠岐の島における黒曜石の採取地。(国土地理院発行2万5千分の1地形図「都万」を使用) 72.1%に縮小

③ 津井地域(男池・女池・愛宕山など)



隠岐の島における黒曜石の採取地。(国土地理院発行2万5千分の1地形図「西郷」を使用) 75%に縮小

隠岐の島産の黒曜石が流通したのは、下図のとおり、島根県のほか、西は山口県・広島県、東は京都府・滋賀県、南は香川県と広い範囲である(島根県益田市の安富王子台遺跡・広島県の郷原(ごうはら)遺跡・丹後半島の京都府の平(へい)遺跡など)。

ひょっとしたら、出雲文化発展の初期の原動力は、隠岐の島の黒曜石にあったとみていいかもしれない。



『いにしへの島根ガイドブック』より

しかも、驚くべきことに、隠岐の島の黒曜石は、下図のとおり、ロシア沿海州の約1万8千年前の遺跡から見つかっており、朝鮮半島からも出土している。

隠岐産黒曜石の分布範囲



海を渡った黒曜石
ロシアでも発見された隠岐産の黒曜石

黒曜石の原産地は、全国で約五〇カ所ほど知られています。このうち石器の材料として採掘・利用されたのは、北海道の白滝、長野県の和田峠、伊豆諸島の神津島、九州の姫島（大分県、腰岳（佐賀県）、そして島根県の隠岐島などわずかです。島根県内の遺跡から出土する黒曜石の大半は隠岐産ですが、石見中西部では姫島や腰岳といった九州産のものも持ち込まれています。

隠岐産の黒曜石は、日本海を越えたロシア沿岸州のウラジオストク・ナホトカ周辺の一万八〇〇〇年前の遺跡や朝鮮半島からも見つかっています。このことは私たちの時間と空間に対する想像をはるかに越えたものでしょう。こうした黒曜石の移動は、当然人びとの移動も意味し、古代人の交流の広さを反映しています。海や山を越えた交流が盛んに行われた時代、石に託された古代人の思いが伝わってきそうです。

『いにしへの島根ガイドブック』より

イザナギ・イザナミの国生み神話と隠岐の島

隠岐の島がはじめて登場するのは、『古事記』である。

イザナギとイザナミの国生み神話である。

『古事記』は、「大八洲(おおやしま)」として、

- ① 淡道之穂之狭別島(淡路島)
- ② 伊予之二名島(四国)
- ③ **隠岐之三子島(隠岐の島)**
- ④ 筑紫島(九州)
- ⑤ 伊岐島(壱岐)
- ⑥ 津島(対馬)
- ⑦ 佐度島(佐渡島)
- ⑧ 大倭豊秋津島(本州)

を掲げているが、隠岐の島はその3番目に列挙されている。

隠岐の島が古代日本人によく知られていた島であったことがわかる。

なお、『古事記』は「三子島」と記しているが、島前の西ノ島・中ノ島と知夫里島を二つに数え、島後島一つと合わせて三つに数えたのであろう。

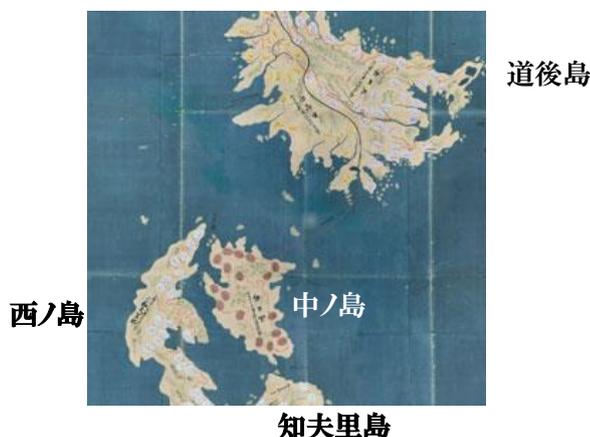
律令時代の郡と郷

大化二年(646)から隠岐国と呼ばれた。

島を一国と数えるのは、壱岐や対馬とおなじである。

平安時代の『和名抄』によると、隠岐国には、4郡12郷があった。

郡	郷	備考
知夫(ちぶ)郡	宇良、由良、三田	道前の知夫里島と西ノ島
海部(あまべ)郡	布施、海部(あま)、佐作(さつくり)	道前の中ノ島
周吉(すき)郡	賀茂、庵可(あむか)、新野(にいの)	道後南部地域
穩地(おち)郡	都麻(つま)、河内(かむち)、武良(むら)	道後北部地域 古い時代は「役道郡」

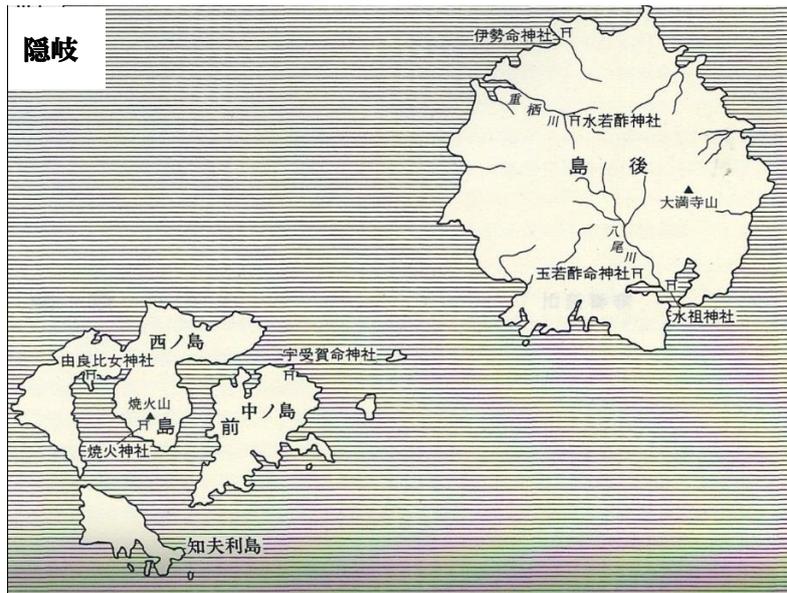


隠岐の島の神々

下表は、隠岐の島にあった延喜式内社の一覧である。全国 2,861 社のうち 15 の神社があるから、小さな島の割には数が多いともいえる。対馬 29 社、壱岐 24 社、隠岐の島 15 社、淡路島 13 社、佐渡島 9 社という「大八洲(おおやしま)」の島々のなかで第 3 位の神社数を誇っている。

隠岐の島の延喜式内社

郡名	神社名	所在地	祭神	備考
知夫郡	1 由良比女神社	道前の西ノ島・浦郷	由良比女命	もとの名は「和多須神」
	2 大山神社	道前の西ノ島・美田	大日靈貴神	天照大神
	3 海(かい)神社	道前の西ノ島・別府	ワタツミ三神 住吉三神	元禄 16 年(1703)の『島前村々神名記』
	4 比奈麻治比売神社	道前の西ノ島・宇賀	比奈麻治比売	・もと濟(寸)の山上に鎮座 ・安政2年(1855)宇賀に遷座 ・明治13年濟(寸)に遷座 ・昭和3年再び宇賀に遷座
	5 真気(まけ)命神社	道前の西ノ島・宇賀	真気命	
	6 天佐志比古神社	道前の知夫里島・郡	天佐志比古命	・一宮大明神 ・大国主命とする説あり
海部郡	7 奈伎良比売命神社	道前の中ノ島・豊田	奈伎良比売命	
	8 宇受賀命神社	道前の中ノ島・宇受賀	宇受賀命	
周吉郡	9 賀茂那備神社	道後南部・加茂	別雷神	
	10 水祖神社	道後南部・西郷町港町	岡象(ミズハ)女神	
	11 玉若酢命神社	道後南部・西郷町下西	玉若酢命	・隠岐惣社・もと国府 ・宮司の億岐家は古来「国造」を称している。
	12 和気能須命神社	道後南部・西郷町下西	和気持能須命	・もと松尾明神 ・景行天皇第五皇子・大酢別皇子ともいわれる。
隠地郡	13 天健金草神社	道後南部・都万	抓津媛命 大屋津媛命	スサノオの娘・五十猛命の姉妹
	14 水若酢命神社	道後北部・郡	主祭神:水若酢命 配神:中言(なかこと)神・鈴御前	・隠岐国一の宮 ・大宮司家は忌部氏 ・周囲には小規模な古墳あり ・記紀に見えない神 ・神社史料が亡失・詳細不明
	15 伊勢命神社	道後北部・久見	伊勢命	



延喜式は、平安時代の967年(康保4)に施行されていることから、ここに掲載された15の神社は、隠岐の島古来の神社とみることができよう。

まとめると、次のとおりとなる。

延喜式時代の隠岐の島の神社と祭神の状況

地域	神社数	祭神				備考	
		出雲系	高天原系	不明	計		
道前	西ノ島	5	0	3	3	6	・高天原系は大日靈貴神・ワタツミ三神・住吉三神
	中ノ島	2	0	0	2	2	・別雷神は建御雷神の可能性はあるが不明で整理
	知夫里島	1	0	0	1	1	・天佐志比古命＝大國主命説があるが不明で整理
道後	南部	5	3	0	4	7	・別雷神は建御雷神の可能性はあるが不明で整理 ・出雲系は岡象女神・抓津媛命・大屋津媛命 ・和氣持能須命＝大酢別皇子説もあるが不明で整理
	北部	2	0	0	4	4	・中言神・鈴御前は後の時代に配祀された可能性はあるが不明で整理
計		15	3	3	14	20	

第一、西ノ島と道後に神社数が多い。古代の中心地はこの2島にあったとみられる。

第二、知夫里島に1社しかないが、西ノ島の由良比女神社は知夫里島から遷座したと伝わる。

第三、『古事記』『日本書紀』に記載のない系列不明の祭神が70%を占めている。

これを広義の出雲系とみれば、出雲系の祭神は全体の85%を占めることとなる。

因幡の白うさぎ

『古事記』の因幡の白うさぎの条で、隠岐の島が登場する。

その内容を要約すれば次のとおり。

1、大穴牟遲神(大国主神)は八十神(兄弟たち)から嫌われていた。

八十神は、稲羽の八上比売(やがみひめ)に求婚したいと思い、稲羽に出かけた時、大穴牟遲神に袋を持たせ、従者のように引き連れた。

2、気多(けた)の埦に来たとき、裸のうさぎが泣いていた。

八十神から「海水を浴びて、高山の尾上で寝ていたらよい」と教えられたのでそのとおりにしたところ、海水が乾くにつれて、体の痛みを苦しんで泣いていた。

3、遅れてやってきた大穴牟遲神

大穴牟遲神がわけを聞くと、うさぎは隠岐の島から因幡に渡るためにワニ(和邇)を欺いたが、上陸寸前で嘘がバレ、ワニたちに全身の毛を剥がれ、泣いていたところ、八十神に海水を浴びたら治ると教えられたが、かえって悪化したことを告げた。

4、大穴牟遲神は治療法を教える

大穴牟遲神は、河口の水で体を洗い、蒲(がま)の穂をとって敷き散らして、その上を転がって花粉をつければ、回復すると教えた。そのとおりにするとうさぎは回復した。

5、白うさぎの予言

白うさぎは、八上比売は八十神の求婚を断り、大穴牟遲の求婚を受け入れるだろうと告げた。

もちろん、因幡の白うさぎの話は、大穴牟遲神(大国主神)のやさしい人柄を讃える寓話(allegory, fable)といえるであろう。

似たような話が世界各地に残されている。

たとえばシベリア少数民族の民話に、アオサギによって孤島に運ばれてたキツネがアザラシに頭数を数えるといって一列に並ばせ背中を渡って戻るが、キツネは渡った先で獵師の獲物となり、毛皮を剥がれてしまう話があるという(稲田浩二『世界昔話ハンドブック』三省堂)。

また、インドネシアの民話では、洪水のために川を渡れなくなった小鹿がワニを騙して集め、背を踏み歩いて渡り、愚かなワニをあざ笑うという因幡の白うさぎによく似た話があるという(小和田哲男『この一冊で 日本の歴史がわかる』三笠書房)。

アフリカの民話でも、湖を回り道するのを嫌ったうさぎが親類の数を誇るワニを挑発し、騙して湖を渡るが、ワニに尻尾を食いちぎられてしまった。このためうさぎの尻尾が短くなったという(桔梗泉・竹下景子『子どもに語る世界昔ばなし 201 話』主婦と生活社)。

このように、文学的な意味においてはきわめて重要な問題をはらんでいるが、神話のなかから歴史の核を見出そうとする立場としては、文学とは異なったアプローチが必要である。

まず、因幡の白うさぎの舞台として、隠岐の島が登場していることである。

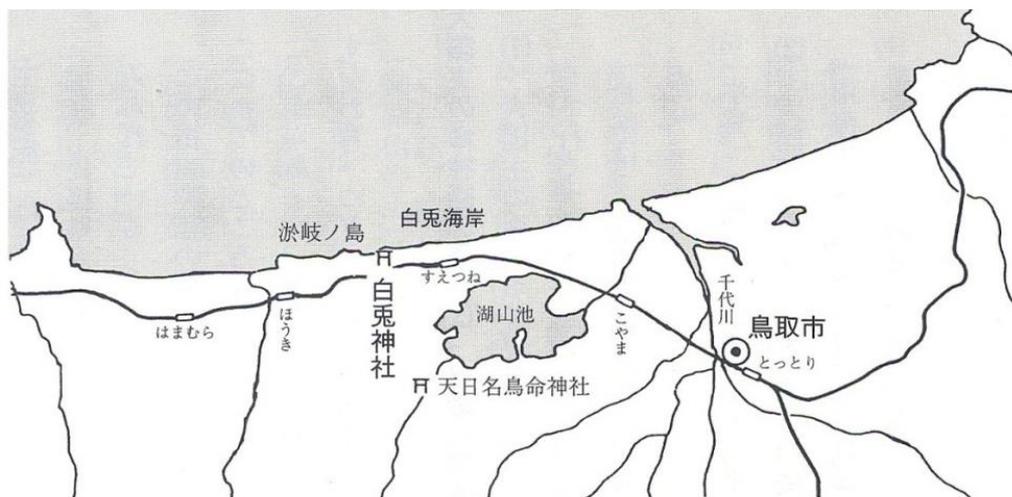
これまで述べてきた隠岐の島とみるのが順当であろうが、そうではないとする説もある。

鳥取県鳥取市に、白兎海岸・白兎神社があり、しかも沖之島(淤岐島)まで揃っている。

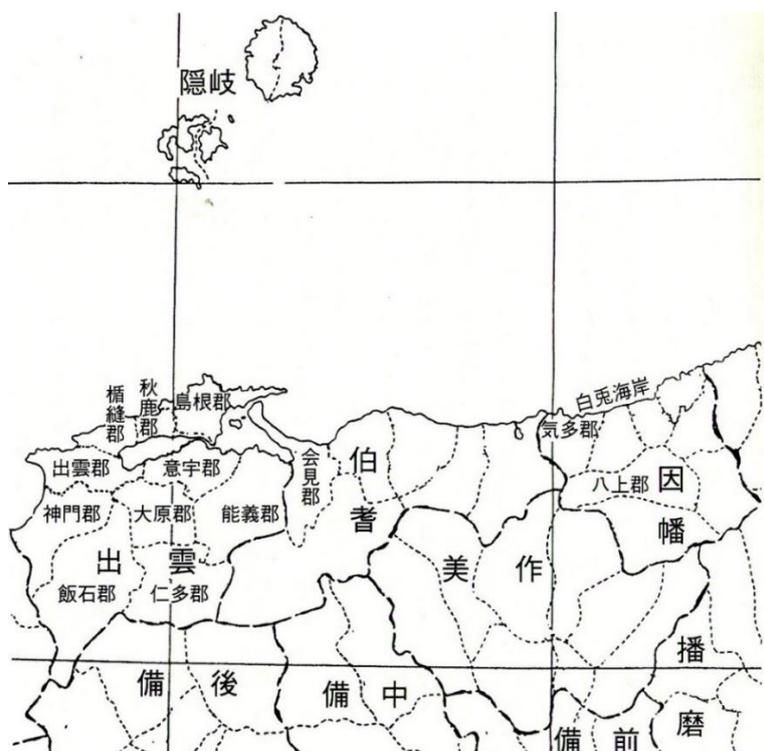
白兔神社は白兔神を主祭神としており、延喜式内社ではないが、寛政七年(1795)の安部恭安の『因幡誌』には、

「松林の中に白兔神社あり、大兔大明神あるいは兔の宮と称す。神社の後山を高尾という。その白兔が身を伏せたとところを伏野という。気多之前(気多の埼)、淤岐之島なども海浜の名称として今に伝えられている。神代より今に至るまで幾千年、その故事は現在まで伝えられて滅びていない。本国第一の神廟である」

と記されている。



白兔神社、白兔海岸、淤岐ノ島



もちろん白うさぎの話は前述したように一つの寓話ではあるが、大国主命の活動エリアのなかに隠岐の島が含まれている点において、きわめて重要な歴史的情報を含んでいるといえよう。

出雲との距離や島の祭神の状況を見ても、隠岐の島が出雲の支配領域に含まれていたのはまちがいない。

出雲にとって、朝鮮半島や大陸との交流において欠くことのできないゲートウェイであると同時に、北陸地方との交流においても大きな役割を果たした可能性が高い。

そういう意味で、隠岐の島の歴史の解明は、壱岐や対馬とおなじく、日本古代史の解明に直接結びついているきわめて重要なテーマともいえる。

(以下、つづく)

【これまで季刊「古代史ネット」に連載された河村哲夫氏の論文】

季刊「古代史ネット」	日本古代通史・連載回数	テーマ
創刊号(2020年12月)	第1回【プロローグ】	【Ⅰ】卑弥呼の鏡【Ⅱ】天照大神の鏡
第2号(2021年3月)	第2回【奴国の時代①】	【Ⅰ】邪馬台国前史としての奴国 【Ⅱ】高天原の神々
第3号(2021年6月)	第3回【奴国の時代②】	朝鮮半島南部の倭人の痕跡
	第4回【奴国の時代③】	北部九州のケニグニ
第4号(2021年9月)	第5回【奴国の時代④】	奴国の神々
第5号(2021年12月)	第6回【邪馬台国の時代①】	卑弥呼の登場
第6号(2022年3月)	第7回【邪馬台国の時代②】	卑弥呼の外交①
第7号(2022年6月)	第8回【邪馬台国の時代③】	卑弥呼の外交②
第8号(2022年9月)	第9回【邪馬台国の時代④】	邪馬台国への道・三韓諸国
	第10回【邪馬台国の時代⑤】	邪馬台国への道・対馬と壱岐
第9号(2022年12月)	第11回【邪馬台国の時代⑥】	未盧国と西海の島々
	第12回【邪馬台国の時代⑦】	未盧国から伊都国へ
第10号(2023年3月)	第13回【邪馬台国の時代⑧】	伊都国から奴国へ
第11号(2023年6月)	第14回【邪馬台国の時代⑨】	奴国から不弥国へ
	第15回【邪馬台国の時代⑩】	夜須をゆく
	第16回【邪馬台国の時代⑪】	朝倉をゆく
	第17回【邪馬台国の時代⑫】	日田をゆく
第12号(2023年9月)	第18回【邪馬台国の時代⑬】	投馬国は豊の国
	第19回【邪馬台国の時代⑭】	狗奴国は肥の国
	第20回【邪馬台国の時代⑮】	狗奴国と卑弥呼の死
	第21回【邪馬台国の時代⑯】	卑弥呼と台与
第13号(2023年12月)	第22回【後期・邪馬台国の時代①】	英彦山と京都平野
	第23回【後期・邪馬台国の時代②】	神夏磯媛と豊比売命
	第24回【後期・邪馬台国の時代③】	英彦山と宗像
	第25回【後期・邪馬台国の時代④】	ニギハヤヒ
第14号(2024年3月)	第26回【後期・邪馬台国の時代⑤】	スサノオと五十猛命
	第27回【後期・邪馬台国の時代⑥】	出雲の神々
	第28回【後期・邪馬台国の時代⑦】	スサノオとクシナダヒメ
第15号(2024年6月) 3論文一挙掲載！	第29回【後期・邪馬台国の時代⑧】	隠岐の島
	第30回【後期・邪馬台国の時代⑨】	大国主命
	第31回【後期・邪馬台国の時代⑩】	大国主命の国づくり